

が一〇例(五九%)をしめる。これを明治新政府が大政官達として、種痘の実施方を全国に布達した明治三年をもって前期と後期にわけると、明治二年までの前期においては一歳児〇、二歳児五例、三歳児三〇例、四歳児二一例に対して、明治三年以後の後期では一歳児六例、二歳児四六例、三歳児二九例、四歳児一一例と、後期において明らかに低年齢化の傾向にあることをしめしている。

これらの種痘は八名の医師によって接種されている。豊田村の馬場某が五七例、国府津村の間嶋英山が五四例、大磯宿の鈴木正雅が五二例、石井玄界が一一例、塩海村の伊達某が一〇例で、杉村連信、片岡村の和田某、矢端村の中西千里がそれぞれ一例である。住所の記載のないのは平塚宿在住といつてよいだろうか。

これらの医師については不明のものも多いが、事蹟を明らかにし得た二、三についてもあわせて報告する。

(順天堂大学医史学研究室)

津藩の種痘

茅原 弘

津藩における種痘の記録としては嘉永三年(一八五〇)冬藩校有造館督学齋藤拙堂が其の孫娘に種痘を受けさせたのが最初である。次いで同四年南勢地区の藤堂領の大庄屋中川九左衛門が子供に受けさせている。この年の秋藩当局も初めて種痘の奨励にふみ切り、領下に触を出し、次いで同年十二月京都の新宮涼閣の来津を得て津で種痘を行なった。

最初は種痘を受ける者は少なく、中川九左衛門も奨励に苦労していたが、たまたま同年より嘉永七年にかけて天然痘が流行し種痘の効果が知られ受ける者が増加した。このため藩は嘉永七年五月津立町に種痘所を新設し、同六月九日開所し無料で八日目毎に施術することとした。

齋藤拙堂は漢学者であったが、当時藩の重臣藤堂数馬(藩校総教、藩新軍制の責任者の一人、火薬製造中爆死)、平松

楽齋などと新しい思想のグループに属し、特に海外事情、蘭学に強い関心を有し、特に彼自身及び其の子の正格（後督学）も天然痘で苦しんだため孫娘に種痘を実施したもので、そのことを詩に賦し、特に種痘実施に苦勞している中川九左衛門にもこの詩を贈っている。この詩の題より拙堂孫娘の種痘は、京都の桐山元沖より受けたことがわかる。

新宮涼閣と津藩との関係は、新宮涼庭が藩校有造館への融資（後献金）などにより関係を生じ、また齋藤拙堂、平松楽齋などとの交遊があったことによる。藩は涼閣に在京のまま医官として百石で召抱へ、涼庭にも十人扶持を給している。涼閣については平松楽齋の日記のなかに「殿様に涼閣のこと委細申し上げる」とか、津城御門出入の門鑑などの記事がある。

涼閣は嘉永年代しばしば津へ来り平松楽齋の家に止宿したこともある。また涼庭も参宮のため津へ泊っている。

涼閣の津における種痘については藩より各村へ触を出している。津市内片田長谷場村の控によると

京都新宮涼閣中町富貴家に逗留いたし居同人は尚更本方

の者に付旅宿へ罷出植痘瘡申請候様謝儀の儀難決者はいたし候に不及御上より御挨拶可被下付何村にて誰々と申儀追而申出候様尚いたし兼不申者は勝手に致候而宜しく来る十九日頃迄逗留いたし候付未だ痘瘡いたし不申者は罷出申請候様可致旨御触十二月十二日廻る

とある。この時涼閣は楽齋日記によると十二月九日より二十一日まで逗留し、二十一日朝津を立って帰京している。ただしこの在津中に何人種痘を受けたかは明らかでない。

このように津藩の種痘は嘉永三年の冬より始まり嘉永七年種痘所の設立を見るのであるが、種痘実施の創成期を、拙堂種痘の詩並びに楽齋日記などを中心として報告する。

（津市）